

オリーブの木

No. 88

2023年5月

イスラエル・パレスチナからのプロジェクト参加者が決まりました！



アンディ・シャニ
(イスラエル)



ダリーヌ・ラマ
(パレスチナ)



ハーデル・アルスラニ
(パレスチナ)



ラハド・シオ
(パレスチナ)



リンダ・アブ・アルハワ
(ヨルダン国籍パレスチナ)



モハンマド・アベド・アルナ
ビ
(ヨルダン国籍パレスチナ)



タル・ジロ
(イスラエル)



ダラ・カランハ
(イスラエル)



マタネル・マン
(イスラエル)



ルイ・シャビラ
(イスラエル)



ヤクブ・ガザウィ
(スタッフとして)

今年は、「聖地のこどもを支える会」が東京都よりNPO設立を認可されて20年の節目の年。たとえ「大海の一滴」でも何とか「聖地の平和」のために役立ちたいと、一步を踏み出してから33年、常に皆様の温かいご支援に支えられてきました。心から感謝申し上げます。

また今年はイスラエル・パレスチナ紛争においても節目の年、イスラエル建国75周年(1948年)、それと裏腹の「ナクバ*」も75周年。「二国家平和共存」という希望の道がやっと見えた「オスロ合意」(1993年)から30年です。しかし残念なことに、紛争解決の糸口はまだ掴めていません。

今年の夏、コロナ禍で中断していた「平和の架け橋プロジェクト」を、「NPO設立20周年記念事業」として再開します。次世代を担う若者の心に、一粒でも多く「平和の種」を蒔くことが必要です。プロジェクトでは、まず被爆地ヒロシマを訪れ「平和と戦争」について“実感する”ことからスタートします。皆様のご支援を心からお願いいたします。

*「ナクバ」＝「大惨事」と訳される。イスラエル建国に伴う独立戦争によって多くのパレスチナ人が土地を追われて難民となったこと。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

「平和の架け橋プロジェクト 2023」 準備を進めています



コロナ禍で中断されていた『平和の架け橋プロジェクト』が4年ぶりに再開！ 2005年（被爆60周年）にイブラヒム神父様の発案で初めてイスラエル・パレスチナという敵対国の青年が日本人とともに広島、長崎、東京で対話を始めて以来、今回で13回目、NPO設立20周年を記念する事業として実施いたします。

このプロジェクトは小さな「平和共存のラボラトリー」です。たとえ「敵」同士でも、日本で、共同生活をとおして次第に心を開き、同じ一人の人間として多様性を受け容れることを模索し、将来、国際的な視野を持ったアクティブな平和構築のリーダーとして成長することを目標としています。18年の間に

スタディ・ツアーも含めて、延べ2百数十人の3カ国の若者たちが参加。彼らの中には、すでに国連などの国際機関、人道支援団体、外交官や新聞記者として「平和の働き人」を実践している人もいます。

プロジェクト期間中に、一般の皆様も参加できるシンポジウムも計画していますので、ぜひ皆様のご支援をお願いします。



2005年8月6日、平和記念公園の慰霊碑に献花し祈りを捧げるイブラヒム神父様と井上弘子（第1回プロジェクト：当時は「平和をつくる子ども交流プロジェクト」と呼んでいた）

プロジェクト候補者への面接から 誰もが語る対話の必要性 どんな対話が生まれるか

2019年夏以来、4年ぶりとなる『平和の架け橋プロジェクト』にイスラエル、パレスチナから参加を希望する若者たちの選考面接が、4月下旬からGWにかけて行われました。対話はコロナ禍で一気に普及したネットを通じてのリモートで、直接の対話が容易でないパレスチナ自治区ガザの青年とも話せました。計18人との面接から得た印象をお伝えします。（当法人理事 村上宏一）

平和へ向けた交流をうたった企画ですから、どちらからの参加希望者もお互いのことを知る大切さを語り、そのための対話の必要性を強調します。

中には父親が、交流の必要性を掛け声だけでなく、居住地のイスラエルからヨルダン川西岸へ入っていき、パレスチナ人と交流する活動を個人的に実践している、と話す男性（24歳）がいました。父親

と同行してパレスチナ人の友だちもいるといいます。

一方で、イスラエル北部に住むアラブ系イスラエル人の女性（22歳）によると、イスラエルとヨルダン川西岸の間を行き来するにはイスラエル兵による検問を通らなければならないという事実すら知らないイスラエル人がいるそうです。彼女は西岸北部のパレスチナ自治区ジェニンという都市の郊外にある大学で学んでおり、週末に大学の寮から実家に帰る度に検問を通るわけで、イスラエルの身分証を忘れたら家に帰れません。しかし、隣人であるパレスチナ人に対する不公正などはイスラエル側では語られないのが普通で、こうした無理解がパレスチナ側の怒りと不信を募らせる悪循環をもたらしています。

面接者のだれもが、この悪循環を断つためには対話を通じて相手を知ることがまず大事だ、という

ことを述べています。それこそがこのプロジェクトの第一の目的ですが、対話の必要性を語る中でfear（恐れ）という言葉が度々出てきたのが印象に残りました。

テルアビブ大学で学ぶイスラエル人女性（25歳）は、同胞の多数派は恐れに突き動かされていると言います。その恐れとは、自分たちはテロを含む敵の攻撃に脅かされているというもので、常に治安を最優先に考える。だからパレスチナ人に対して自分たちが公正でないなど考えることもないというわけです。そして、自国がパレスチナ人を無視し不当な扱いをしていると感じる自分は少数派だと認識し、平和な関係を築くには対話が欠かせないと言います。

一方、ガザ在住のパレスチナ人男性（29歳）は、イスラエルに対する敵対心の強い同胞の前で平和を語ることは恐れを感じるものだと言います。身内を説得することの難しさを知り、イスラエル人が抱く恐れも分かるので、双方がそれぞれに抱く恐れを克服せねばならない、というわけです。

お互いの問題点を理解し、対話の必要性を強調する若者たちばかりが集まると、緊張した議論がなく「なあなあ」の雰囲気で終わってしまいかねないと懸念する声さえ、選考者側から出たほどです。しかし、そう簡単に納得し合うほどソフトな意見ばかり

りではありません。

東エルサレム在住のパレスチナ人男性（23歳）も、反ユダヤ主義による迫害を受けてきた歴史がユダヤ人のトラウマになっており、そこから来る恐れは理解できると言います。さらに、パレスチナ人も抑圧の下で生きてきたのは同じで、圧迫からの解放を共に目指すべきだとしながらも、パレスチナ側の苦境はイスラエルによる占領によってもたらされたもので、「ユダヤ人の被害のつけをパレスチナ人が払わされるのは拒否する」と、そこははっきりさせていました。

同じく東エルサレム在住のパレスチナ人女性（22歳）は、母親がイスラエル市民権を持たないため、ちゃんとしたエルサレム住民かどうか確かめるという口実でイスラエルの武装警察の家宅捜査を受けるという経験をしています。父親はパレスチナ人のエルサレム住民票ともいえる青色IDカードを持っているため、配偶者である母親はエルサレム居住がなんとか認められるという境遇なのです。こうしたイスラエルの占領政策がもたらす様々な理不尽さを切々と語る彼女は、「それでも現実から目を背けない」という決意で相手側との対話に向かおうとしています。プロジェクトに参加したら、イスラエル人参加者との間にどのようなやり取りが生まれるのでしょうか。

ご支援を、紛争の中で生きる若者への一助として

石黒朝香（2005年、07年、09年、東日本大震災直後の2011年被災地でのプロジェクトに参加、2011年から2年間当法人の理事をつとめ、貢献した）

2005年の初回プロジェクトに参加させていただいた際、当時高校生だった私にとって、同じ時代に生まれたイスラエル・パレスチナ人が、同じ人生の期間の中でこれほどに異なる経験をしていることに衝撃を受けました。その時のショックは今でも忘れられず、今の私の原動力になっていると思います。その後、紆余曲折もありな



がら公私に渡ってイスラエル・パレスチナに関わり続けています。

日本の報道では、パレスチナ・イスラエルの情勢についてこの数十年あまり変化がないように映っているかも知れませんが、現場では国際社会の適切な注目を得ぬままに様々なことが、そして概ね悪い方に変化しています。今は和平の重要性を語ることや、双方の人々が交流することを、公に言えない雰囲気になりました。平和を希求する意義を見失い、「2国家共存」の実現性が岐路に立っています。

これまでのプロジェクト参加者の多くは、平和を望んでいる一方で、相手方の紛争の話を真に聞く

チャンスがなかった若者ばかりです。将来を担う世代が、自らの考える平和のあり方を模索することが重要です。

先行きの見えぬ紛争の中で生きる若者への一助として、どうぞ皆様の温かいご支援をお願いいたします。

「平和の架け橋プロジェクト」参加者の体験

ペレグ・バル-オン

（2007年、2009年参加・イスラエル人。2013年には東日本大震災被災地、岩手県大槌町でのプロジェクトに参加した。）



「僕は、このプロジェクトに参加できて本当によかったと思っています。何かすばらしいことをやった時にだけ得られる達成感があります」（2007年、当時高校生）

16年たった後、メッセージを寄せてくれた。

「日本で3度のプロジェクトに参加した経験から、パレスチナ人と日本人の新しい友だちができたことが私にとって最良の結果です。彼らの文化を知り、彼らの見解や意見、そして彼らの生き方の複雑さを知ることができました。特にパレスチナの友人たちと直接会って話したり、討論したり、寝食を共にするのも初めての経験でした。おかげでパレスチナとイスラエルの紛争に対する私の見方が大きく変わりました。僕は、プロジェクト参加後、徴兵義務の3年に加え、5年ほど軍にとどまりましたが、その間いつも心がけていたのは「パレスチナ人も、僕らと同じ人間なのだ」と部下に伝えることでした。」

ラナ・ランティシ

（2016年参加・パレスチナ人。ヨルダン川西岸地区ラマラ在住。二人の兄もプロジェクト経験者。スタディ・ツアーの折には日本人学生をホームステイさせるなど、家族で当NPOを支援している）



「平和と自由への道は私たち若者の目の前にあります。私たちに必要なのは、ただ、目的に向かおうとする持続的な意思です。『平和の架け橋プロジェクト』は、私にとって、平和への旅を始めるための枠組みであり、柱となりました。私は、さらに多くの実りを結ぶことができるよう、このプロジェクトを次世代に受け渡したいと思います。」（2016年）

彼女は7年後の今も、パレスチナ人のプロジェクトへのリクルートに協力を惜しまない。彼女は言う。

「イスラエルの現政権が反アラブ人種差別主義を掲げる政党と連立して、パレスチナ人への挑発や人権侵害をエスカレートさせる今、『平和の架け橋プロジェクト』に参加を希望する人はほとんどいません。パレスチナ人はみんな、『なぜ占領者であるイスラエル人と仲良くする必要があるのか』と反論してきます。」

遺贈・相続寄付をご検討の方へ

あなたの財産、そして大切な方からの遺産をイスラエル・パレスチナの子どもたちの教育支援に役立てませんか？

当法人では遺産・相続財産のご寄付も、ありがたく頂戴しております。将来、平和の担い手となるイスラエル・パレスチナの子どもたちの教育支援や国際交流事業などの活動に使わせていただきます。

**聖地のこどもを支える会は、
認定NPO法人です。
ご遺族による相続財産からのご寄付は
税制優遇の対象となります。**

遺贈・相続財産の寄付に関心をお持ちの方は、
当法人事務局までお問い合わせください。

TEL.03-6908-6571

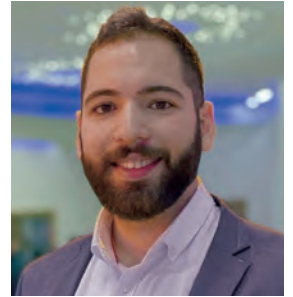
「敵と交流せず、彼らの存在を無視するのは簡単でしょう。私もパレスチナの歴史を忘れてはいません。でも私はプロジェクトの経験から、双方で対話を続け理解し合うことが何よりも大切だと知っています。」ラナが繋いだ世代が、今年も『平和の架け橋プロジェクト』に参加する。

ジャック・ダーダル

(アラブ人・イスラエル国籍)

このプロジェクトで、紛争相手であるイスラエル人の若者と対話し、彼らの立場や意見を聞く機会を持てたことは非常に貴重な体験でした。これからの「平和構築」には不可欠なことです。特に感動した

のは、広島でのワークショップで、日本人がこの大きな悲劇を乗り越えて、どのように平和の街として生まれ変わっていったかを知ったことです。これこそ私が求めていたことであり、私たち



パレスチナ人とイスラエル人の仲間たちが互いに受け入れ合い、共存できれば、次世代のためにもっと平和な社会を作ることができるという動機づけとなりました。今は日本で学んだことに感謝しながら、日本の企業で働いています。

長野での「平和の架け橋プロジェクト」

福島貴和 (当法人理事 信州善光寺玄證院住職)

2016年以来、長野に集うイスラエルとパレスチナの若者たちを見てきて思うのは、このプロジェクトを善光寺で行って本当に良かったということです。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教すべてにとっての聖地から来たのですから、日本仏教の聖地である善光寺の雰囲気は強く感じられたのではないのでしょうか。特にお盆の縁日近くの来長ですので（近くに長野に滞在するので）、善光寺境内での盆踊りに参加できたことは、彼らにとって、日本の文化に触れた良い機会であったと思います。

仏教の聖地と書きましたが、善光寺の雰囲気は特別のものがあります。先ず「差別がない」ということが挙げられます。女性差別の激しかった昔から、善

光寺は女性に対する差別はまったくありませんでした。日本仏教の特徴として宗派主義がありますが、善光寺には宗派に対する差別もありません。本当に平和なのです。「平和の架け橋」にはピッタリの場所なのです。

そういうわけで、本プロジェクトに協力して下さるボランティアさんたちの雰囲気も、ごく自然に平和です。互いにいがみ合う関係のイスラエル・パレスチナですが、少なくとも日本に滞在中は、平和の感覚を十分に味わっていただきたいと思います。そして帰国後の現状はどうであれ、日本で味わった平和を思い出して、将来の両国での平和実現のために努力していただきたいと切に望みます。

イスラエル、パレスチナの若者がヒロシマに来るということ

内藤徹 (当法人理事 元JICA職員、「仕事を辞めてエルサレムで主夫してきた」著者)

2年ほど前からこの団体に関わり始めた僕にとっては、初めての「平和の架け橋プロジェクト」だ。

僕はコロナが広がる前、2018年から2020年までエルサレムに住んでいた。エルサレムはイスラエルとパレスチナの境目にある都市だ。東側にはパレスチナ人が住んでいるが、そこはイスラエルに占領されていて、イスラエル人とパレスチナ人が、分離壁もな

く幹線道路を挟んで、お互いが別れて住んでいる。

彼らは、普段から戦っている訳ではない。エルサレムではお互いが抑制しているともいえるし、イスラエルの治安当局がコントロールしているともいえる。そもそも、彼らはお互いが話し合うことも少ないし、西と東で行き来も少なく、友達になることもほとんどない。いずれにせよ表向きは平穏のように暮らして

いる。

一方、パレスチナ自治区と呼ばれるヨルダン川西岸やガザに住んでいるパレスチナ人は、分離壁に囲まれて住んでいて、イスラエル人と出会うこともない。直接会うのは、兵士くらいだ。だから西岸やガザに住むパレスチナ人にとって、イスラエル人=怖い兵士というイメージだ。

そしてイスラエル人にとっても、分離壁の向こうには行くことができないし、怖くて行きたくもない。なぜなら、そこは「テロリスト」が住むところだからだ。多くのイスラエル人にとって、パレスチナ人=怖いテロリストというイメージだ。

お互いが怖いと思っているパレスチナ人とイスラエル人の若者が、日本にやってくる。すでに来る予定の若者の数人とオンラインで話をする機会があった。どうも、このプロジェクトに来るイスラエル人は、典型的なイスラエル人のイメージとは異なり、パレスチナに対して友好的な人が多い印象だ。一方パレスチナ人も、イスラエル人と会って話をしてみたい、と心を開いている人が多いようだ。一部のひとと少し話をしただけだから、よく分からないけれど、そんな風に僕には見えた。

さて、そんな彼らが8月にやってきて、最初に行くのが広島だ。実は僕は広島に住んでいた。広島は、平和や原爆が非常に身近で大事なテーマであり、また、世界の人々にとって特別な場所であることを、常々感じていた。その時はJICAという国際協力を行う日本政府の組織に勤めていた。当時関わった仕事で、印象的な出来事が2つある。1つは、2014年にフィリピンのミンダナオ和平の会合が広島で開かれ、故アキノ元大統領が来日した時のことだ。アキノ氏は、対立

する政府側とモロ・イスラム解放戦線側の関係者との理解を深める国際会議のために急きょ来日することになった。その時の演説で「広島は、かつて戦った者たちが紛争をやめ、友好的に話し合うのにふさわしい地だ」と語ったのが印象的だった。

もう一つ印象的な仕事は、同じ年に行なったルワンダの虐殺からのサバイバーと、広島の被爆生存者とオンラインでつないだイベントのことだ。1994年、100日間で80万人が殺されたと言われるルワンダ大虐殺のサバイバーは、「70年以上生き延びた広島の被爆者の存在は、人生の先輩として希望だ」と語った。何か2人だけで通じ合う様子が伝わってきたのがとても印象的だった。

広島は、人類の戦いがもたらす悲しみに触れ、自分にできることを考えるのにふさわしい土地だ。その意味では、イスラエルとパレスチナの若者が、自らの地を離れ、日本人とともに、お互いを理解するのにふさわしい場である。

今年日本に来る若者が、どのようなことを語り、感じ、日本での滞在を過ごすのか。楽しみでもあり、興味深い。そして、彼らが日本に来られるのも、多くの方々が当法人の活動を支持し、寄付をいただいているおかげでもある。あらためて感謝申し上げたい。



支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- * 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます！

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**
または **042-636-9218** (中山)

コーヒー飲んで応援！

イエメン産
モカ・コーヒー

100g粉
2160円(税込み)

挽きたてが一週間後に届きます！

注文はこちら➡
03-6908-6571



ネタニヤフ政権、最高裁の力を削ぐ司法改革の試み失敗

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

極右政党を取り込んだイスラエルのネタニヤフ政権が、主な政策目標の中で最初に取り組んだ司法制度改革の目論見が、国民の猛烈な反発を受けて挫折しました。司法制度改革？ 日本では「敵基地攻撃の能力を保有する」という、憲法に抵触するのではないかという政策が国会審議を経ず、閣議決定ですまされても、司法の場で問題にされていません。イスラエルではなぜ争点となり、なぜ国を挙げての論争を呼んだのか。背景を探ってみます。

「最右翼政権」の最優先政策

ユダヤ至上主義的主張が強い極右会派を含むイスラエル史上最右翼といわれる政権が発足したのは昨年12月29日でした。それから間もない今年の1月4日、レビン司法相（第1党リクード）が司法改革案を発表しました。連立政権を組む時に各会派間で合意した優先政策の一つであるのは確かです。改革案の内容の主なものは：

- 最高裁判事の選任に当たる「司法選抜委員会」の人数を、現在の9人から11人に増やす
- 現在の最高裁判所判事3人、弁護士協会・国会議員・閣僚各2人という構成を、議長を務める司法相をはじめ閣僚3人、国会の司法関連委員会の長3人、最高裁から長官と判事2人の計3人、司法相選任の民間人2人（1人は弁護士）とする
- 最高裁は現在、法律や政府の政策について、国家基本法に照らして無効にできる司法審査権を持つが、国会の多数決でこれを取り消すことができるようにする

などです。このような改革案が出された背景はこうです。

司法選抜委員会による最高裁判事の指名には現在、9人のうち7人の賛成が必要とされています。つまり判事の指名には、3人が反対すれば認められないという強い拒否権を選抜委員会が持っており、右派政権内には、民主的な選挙で選ばれた立法府や行政府とのバランスが取れていないという不満があります。そして、左派色の強い最高裁が判事の任免を牛耳って国政に過度の影響を及ぼしている、と見て

いるのです。

改革案のような構成に変えれば、行政・立法府出身のメンバーが多数を占め、司法相が指揮を執って最高裁側の力を抑えられるようになります。

チェック&バランスの危機

ことは判事の任免だけの問題ではありません。前述した最高裁による司法審査権が骨抜きにされかねない、という問題です。イスラエルには明文化された憲法はなく基本法がその役割を果たしており、その中で、最高裁が立法府による法律や行政府による政策を審査し、基本法に反すると判断すれば法律を破棄したり施策を差し戻しさせたりできる、としています。人権を擁護するために欠かせない、司法によるチェック機能とみなされてきたのです。

しかし、特に右派・宗教政党の政治家やその支持者たちは、ユダヤ人入植地の拡大の制限とか、超正統派と呼ばれる宗教勢力の自治制限とかの司法判断に対し、左派や世俗派に偏っていると反発してきました。去年の選挙を受けての右派政権成立は、反撃のチャンスととらえたのでしょう。連立合意の中で、優先政策として掲げられたのが「宗教政策のユダヤ教色強化」「司法改革による立法、行政に対する司法の統制力の抑制」「ヨルダン川西岸のユダヤ人入植地拡張、西岸の併合」などでした。そして政権が発足して早々に打ち出したのが、いわば政策推進の邪魔になる司法権の抑制です。

ところが、この試みに対する抗議の動きは素早く、激しいものでした。司法相が1月4日に司法改革構想を発表すると、7日には、イスラエル第2の都市テルアビブで2万人の抗議集会が開かれました。すぐに動き出したのは、「最右翼政権」の誕生に危機感を持った人々です。そもそも、汚職容疑などで起訴されているネタニヤフ氏が首相に返り咲いたことにも反発がありました。集会で掲げられたプラカードの中には、英語のPrime Minister（首相）をもじってCrime Minister（罪人大臣）と書かれたものもありました。

司法改革派が好んで口にする言い分は、民主的に



ネタニヤフ政権が打ち出した司法制度改革に反対するデモが5月20日で20週目に入った。異例の大規模デモだ。

選出された議員から成る立法院と、その多数派に支えられる行政府の権限が、偏向した判事たちが優位を保つ司法府によって抑制されるのはおかしい、というものです。これに対し反対派は今の内閣について、極端な考えを持つ少数勢力が連立維持の死命を制して発言力を握っており、国民の多数を代表するものではないとして、司法改革は「クーデターだ」とまで呼んでいます。

抗議集会やデモは毎週末の土曜日に行われ、全国に広がって規模もどんどん膨れ上がりました。2月中旬に法案が国会の委員会でも可決され本会議の審議に回されると、抗議行動はさらに熱を帯びて3月25日には、反対を叫んだ市民の数は主催者側の発表によると全国で63万人にのぼりました。イスラエル史上最大の動員数です。

軍事部門からまで抗議の声

注目すべきなのは人数だけではなく、委員会での法案可決が迫った時、医療や教育関係者たちがストを呼びかけたほか、軍の元参謀総長が国会周辺のデモを呼びかけました。さらに予備役兵が首相府の前でハンガーストライキに入ったり、防衛産業の従業員たちが就業拒否をしたりしたのです。治安を最重要課題とするイスラエルで軍事関係者まで立ち上がった影響は大きいものでした。そのメッセージは「民主主義なしに国の安全はない」というものです。この流れを受けて国防相が3月25日、改革法案の審議中断を要請しました。

閣内からの造反に、ネタニヤフ首相は翌日、国防相

の更迭で応じましたが、この処置がさらに反発を煽りました。各地で道路が封鎖される騒ぎとなり、労組がゼネラルストライキを宣言、空港の職員ストで空の便が止められる事態に。しかも財界人まで「恐るべき混乱から国を救うため」と、反対行動に加わったのです。そして3月27日には、ヘルツォグ大統領が立法に向けた手続きを停止するよう要請。大統領に命令権はありませんが、ネタニヤフ首相はこれに応じて法案の審議を停止しました。

停止の理由は「反対派との妥協を探る対話のため」というもので、審議を1カ月延期するとしています。反対派からは、法案の撤廃まで抗議行動を続けるとの声も出ていますが、「延期」と表明した裏には、ベングビール国家安全保障相からの圧力があります。ベングビール氏が所属する極右会派「宗教シオニズム」が国会（120議席）に占める14議席は、合計64議席でなんとか国会の過半数を握る連立政権の維持には欠かせない勢力です。司法制度改革反対派が指摘する「少数勢力が発言権を握る内閣」であり、「司法改革から撤退すれば連立を離脱するぞ」という脅しが効いているわけです。それをなだめるかのように、ネタニヤフ首相は治安警察的な組織の創設を発表し、ベングビール氏に管轄させると約束しました。審議停止は、今のところまだ続いています。

現内閣の連立合意の優先政策には「ヨルダン川西岸のユダヤ人入植地の拡張、あわよくばイスラエル領への併合」というものもあります。極右会派が強く主張しているもので、少数派の圧力がこの政策にも影響を与えるのか、目を離すことができません。

NHK解説主幹 出川展恒 講演会のお知らせ



エルサレム支局長、カイロ支局長を歴任され、中東・イスラム地域の専門家としてNHKのニュース解説などでおなじみの出川展恒氏による講演会を開催します。分かり易く解説なさる出川さん、今回は、『中東の地殻変動を読む』というテーマで、最新の中東情勢についてお話いただくことになりました。

講演内容

イランとサウジアラビアが、中国の仲介で、関係正常化し、シリアのアラブ連盟への復帰など、ここにきて中東のパワーバランスに変化が起こりつつあるようです。一方イスラエルとパレスチナは、まさに、「イスラエル建国」と、「パレスチナの大惨事」から75年、双方が歴史的に和解したオスロ合意から30年となる今年、和平プロセスが進展なく取り残され、むしろ、軍事的緊張が高まっていることを解説していただきます。

日時：7月8日 開場：18:45 開始 19:00（出川さんのお話は19:10頃） 終了 20:30

会場：聖イグナチオ教会ヨゼフホール 東京都千代田区麹町6-5-1

JR中央線（麹町出口）・東京メトロ丸の内線・南北線（赤坂出口） 四ツ谷駅下車（徒歩1分）

会場参加 ➡ 参加費：無料（会場でカンパをお願いします） Zoomでの参加 ➡ 参加費500円

お申し込みは Tel 03-6908-6571
Tel 090-6538-3255

右のQRコードからでも ➡



ヤクーブ・ガザウィ (Yacoub GHAZZAWI)。イスラエル国籍のパレスチナ人。1989年3月30日エルサレム生まれ。聖墳墓教会、聖誕教会、受胎告知教会、聖なる救い主教会などでオルガニストとして活躍。

ヤクーブ・ガザウィ 「平和を願う」パイプオルガン・コンサート

当法人スタッフとして活躍し、「平和の架け橋プロジェクト」のリーダーでもあるヤクーブ・ガザウィは、一方で聖地の主なカトリック教会で活躍するプロのパイプオルガン奏者です。

プロジェクト2023のために来日、東京、大阪近辺の教会でチャリティコンサートを計画しています。『平和への願い』をこめたパイプオルガンの響きに共感して、イスラエル・パレスチナ問題に関心を持っていただき、また当法人の『平和の架け橋プロジェクト』をご支援していただければ幸いです。

コンサートは7月下旬、8月下旬の予定

詳細が決まり次第、
当法人のHP等でお知らせします。
楽しみにお待ちください！



2020年「聖なる救い主教会」(エルサレム)にて、ヤクーブの演奏はこちら ➡

「平和の種」紛争地に植える

イスラエル・パレスチナの若者、日本で対話20年

70年以上争いが続くイスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者と共同生活しながら平和について語り合う。そんな試みが20年近く続いている。初回から参加し、8月に広島で行われるプロジェクトを企画するパレスチナ人のヤクープ・ガザウィさん(34)は「僕たちは戦争を止めることはできないが、平和の種は植えられる」と参加を呼びかける。

ユダヤ人が祖先の土地であるといわれるパレスチナへの移住を進め、1948年にイスラエルの建国を宣言したことが紛争のきっかけだ。そこに住んでいるパレスチナ人は、反発し、度重なる大規模な軍事衝突が起きている。同じ街で暮らしているパレスチナ人は、学校では別。パレスチナ人がイスラエル側に行く時は、イスラエル兵が見える。



④食卓を囲み、共に寝泊まりしながら仲良くなっていく参加者たち。2018年8月、イスラエル、パレスチナ、日本の若者で東日本大震災直後の宮城県に駆けつけ、舟を引き上げた。2011年8月、いずれも聖地のことを支える会提供



張る検問所を通る必要がある。エルサレムで育ったガザウィさんも同世代のイスラエルの知人のおらず、身近で知るのには母の友だちぐらいだったという。そんなガザウィさんを変えたのが「平和の架け橋プロジェクト」だ。NPO法人「聖地のこどもを支える会」(井上弘子理事長)が2005年から始めた企画は、紛争の当事者ではない日本人が、対話の場を作る試み。ガザウィさんは16歳の時にエルサレムの教会の神父の薦めで初回に参加し、初めて日本を訪れた。「人生を変えるような経験になった。他の人たちにとても同じだと思ふ」

広島では、イスラエル人と共に原爆ドームを見た。エルサレムで暮らしていたら、身近な場所の爆撃には「慣れていた」。それでも「核兵器を使っ

た後の惨状を知った。イスラエルとパレスチナでも、核が選択肢になるかもしれないと危機感を持つて考えるようになった」という。この問題をもっと知らなくては、と毎年のように参加し、企画する側にまわった。

共同生活で、若者同士が「触即発」になることもある。パレスチナ人がホロコーストの画像をイスラエル人に見せ、イスラエル人全員が部屋を出て行ったこともあった。それでも、対立する地域から来た若者が憎しみや不安、恐怖を少しずつ打ち明けながら、最後には涙を流して「あなたもつらかったね」と抱き合う。ガザウィさんは何度もそんな姿を見てきた。

プロジェクト後も交流は続く。ガザウィさんの妹はイスラエル人の女性と大親友になった。その後、その女性が兵役に入っている時に、ガザウィさんの自宅近くを通り、

時に一触即発 恐怖打ち明け親友に

あいさつに立ち寄って話に花を咲かせたこともあった。

何度か広島を訪れたガザウィさんはプロジェクトを通じて「目の前の一人一人の考え方を考えることはできる」と考える。だからこそ、いろんな人がそんな経験を重ねてほしいと思う、企画に携わる。エルサレムの聖墳墓教会のオルガニストだったガザウィさん。プロジェクト後には、全国の教会でパイプオルガンを弾きながらイスラエル・パレスチナの現状や「平和」について訴えかける。

◆ 今年のプロジェクトは8月9〜22日、広島を訪れるほか、長野県の善光寺、東京都などに滞在する。募集人員は18〜29歳の6人で、イスラエルとパレスチナからは9人が来る予定。プロジェクトの詳細はNPOのHPから。今夏の募集は5月15日まで。(川野由起)



聖地のこどもを支える会のウェブサイトをQRコードで検索

紛争続くパレスチナとイスラエル 日本で だから生まれた友だちの関係

川野由起 2023年5月2日 17時00分

70年以上争いが続くイスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者と共同生活しながら平和について語り合う。そんな試みが20年近く続いている。

初回から参加し、8月に広島で行われるプロジェクトを企画するパレスチナ人のヤクブ・ガザウィさん(34)は「僕たちは戦争を止めることはできないが、平和の種は植えられる。心を開いて互いの声を聞き、尊敬の心や友情を育ててほしい」と参加を呼びかける。

ユダヤ人が祖先の土地であるとされるパレスチナへの移住を進め、1948 年にイスラエルの建国を宣言したことが紛争のきっかけだ。そこに住んでいたパレスチナ人が反発し、度重なる大規模な軍事衝突が起きている。

同じ街で暮らしていてもほとんどの場合、学校教育は別だ。パレスチナ人がイスラエル側に行く時は、イスラエル兵が見張る検問所を通る必要がある。エルサレムで育ったガザウィさんも同世代のイスラエルの知人はおらず、身近で知るのは母の友だちぐらいだったという。

一触即発の事態もそんなガザウィさんを変えたのが「平和の架け橋プロジェクト」だ。

NPO法人「聖地のこどもを支える会」(井上弘子理事長)が2005年から始めた企画は、紛争の当事者ではない日本人がいる中で共同生活しながら対話の場を作る試みだ。互いを「自分と変わらない一人の人間」と認め合い、命の尊さを実感してほしいという願いがプロジェクトには込められている。

ガザウィさんは16歳の時にエルサレムの教会の神父の薦めで初回に参加し、初めて日本を訪れた。「人生を変えるような経験になった。他の人たちにとっても同じだと思う」

広島では、イスラエル人と共に原爆ドームを見た。エルサレムで暮らしていれば、身近な場所の爆撃には「慣れていた」。それでも「核兵器を使った後の惨状を知った。イスラエルとパレスチナでも、核が選択肢になるかもしれないと危機感を持って考えるようになった」という。この問題をもっと知らなくては、と毎年のように参加し、企画する側にまわった。

共同生活で、若者同士が一触即発になることもある。パレスチナ人がホロコーストの画像をイスラエル人に見せ、イスラエル人全員が部屋を出て行ったこともあった。

それでも、対立する地域から来た若者が憎しみや不安、恐怖を少しずつ打ち明けながら、最後には涙を流して「あなたもつらかったね」と抱き合う。ガザウィさんは何度もそんな姿を見てきた。

プロジェクト後も交流は続く。ガザウィさんの妹はイスラエル人の女性と大親友になった。その後、その女性が兵役に入っている時に、ガザウィさんの自宅近くを通り、あいさつに立ち寄って話に花を咲かせたこともあった。

戦争は止められない。でも…その後、兵役に入っていた際、銃を携えた軍服のままの格好で家に遊びに来たこともあった。

昨年末、イスラエルでは極右勢力を含むネタニヤフ政権が誕生した。パレスチナ人が居住するヨルダン川西岸のユダヤ人の入植地をイスラエル領に編入しようとする動きも見せている。ガザウィさんの自宅のすぐそばでも暴動が起き、男性が殺されるような事態になっている。70年を超える紛争は「終わりのなき報復の連鎖だ」とガザウィさんは言う。

何度も広島を訪れたガザウィさんはプロジェクトを通じて、「戦争を止めることはできない。でも、目の前の一人一人の考え方を変えることはできる」と考える。だからこそ、いろんな人がそんな経験を重ねてほしいと思い、企画に携わる。

エルサレムの聖墳墓教会のオルガニストだったガザウィさん。プロジェクト後には、全国の教会でパイプオルガンを弾きながらイスラエル・パレスチナの現状や「平和」について訴えかける。

日本の若者の参加を募集

プロジェクトではこれまで、広島や長崎を訪れて日本の戦争の歴史について学んだり、歴史ある寺院に泊まって宗教の違いについて話し合ったり、福祉施設を訪れたりしてきた。

東日本大震災が起きた11年から、宮城県や岩手県を訪れ、5年にわたって仮設住宅への訪問や海岸清掃などのボランティアを続けてきた。

今年のプロジェクトは8月9～22日、広島を訪れるほか、長野県の善光寺、東京都のJICA東京国際センターなどに滞在する。募集人員は18～29歳の6人で、イスラエルとパレスチナからは9人が来る予定。

NPOのプロジェクトにはほかに、日本の若者がイスラエル・パレスチナを訪れるスタディーツアーもある。

三大宗教の聖地であるエルサレムやパレスチナ自治区のヨルダン川西岸地区にあるベツレヘム、イスラエルの首都・テルアビブなどをおよそ 2 週間かけてまわる。第2次世界大戦でユダヤ人が虐殺された歴史を伝えるホロコースト博物館や、パレスチナ人の難民キャンプにも行く。それぞれの暮らしの違いを知るためにホームステイする。ガザウィさんの家にも50人以上が泊まった。

NPOの井上理事長(84)は「『敵』であっても一緒にいれば友だちになれる。遠い国の話が、『友だち』の話になる。小さな体験でも、心にまかれた理解や喜びの種は、どこかで花を咲かせるはずだ」と話す。

プロジェクトの詳細は NPO の HP

(<https://seichi-no-kodomo.org/activity/exchange/peace-bridge/application/2023-detail/>) から。

今夏の募集は6月15日まで。(川野由起)*

* 川野由起：平和の架け橋プロジェクトとスタディーツアーに複数回参加。現在朝日新聞の記者として活躍している。

上がる反政権の声



司法制度改革に抗議する大規模なデモが続く。昼も夜も数万から10万人の人が参加。(エルサレム)

2022年スタディ・ツアーから



聴覚障害児のためのエフェタ学院 (ベツレヘム)：日本の里親に支援されている子どもたちが集まってくれた。幼稚園の時から支援されている子もいる。



ラサール学園の小学5年生、初めての折り紙に興味津々！(エルサレム)



テラサンクタ学院の高校生たちと日本のスタディ・ツアー参加者 (エルサレム)



聖ヨゼフ学院の幼稚園生 (エルサレム)

子どもたちもアートしてます



聴覚障害児のためのエフェタ学院 (ベツレヘム) の子どもたちの作品



見て、綺麗でしょ？

分離の壁美術館

上：分離の壁の上を自転車で走る！！
中：暗闇の中でイスラエル兵に銃を向けられている少年。誰かがスマホで照らしている。
後ろにはエルサレムの岩ドームが。絵の前には、銃の置物か。
下：イスラエルの軍機を見上げるイエスの肖像画。顔には恐怖の表情が。

